

加越文人の交遊

——野村空翠を中心として（その1）——

畑 中 榮

はじめに

化政年代における地方文人の活躍については、既に多くの研究に尽くされている（注1）、北陸の文人についても拙著「加越能詩作者略伝」に鋭意紹介中である（注2）。しかし加越における文人達の動向について、何程かの考察を加えたものは数えるほどしかない。その殆どは石川・富山県史や各市史の類であり、しかも漢詩文の記述については僅かに数頁巻頭を飾る程度のものが殆どである。そんな中で大西紀夫氏は、東林を通して越中詩壇の動向を鳥瞰しようと試み、「東林とその時代」として発表されたが（注3）、これが唯一のものに思える。

しかし加賀文人の活動に目を向けると、彼等が化政期を境にせきを切って活動し始めた文化活動——なかなか漢詩文に対する知識や見識を深め高めるために、殆ど求道者のごとき熱心さで全国を行脚し求め続けた痕跡を残す作品群は、殆ど手つかずのまま厳として

残存するし、その熱狂的な時代相を伝えるべき生き様も、人目に触れぬまま封印されて存する。一例を金澤の買人で富巨万を累ねた俵屋の主人、銭田立齋の遺稿に見てみる。立齋は名を青、字を銅輔、号を立齋と称し、空翠より十三歳の年長であるが、この人もまた空翠と時を同じくして詩文を好み、小集を自邸に開いて交誼を楽しんだ人である（注4）。

近世、文運大いに開け、下は黔黎（庶民）に到るまで皆文を能くし書を解す。しかしてその弊たるや、庶人にして心をその業に専らにせず。詩賦を学び書畫を習ひ、文雅を仮りて、縁飾に誇る。気は自ら高きをもつて世人を蔑視し、その孝弟遜順の行においては、漫りがわしくして之を省みざるものまた、往々これあり。その軽薄亡狀は余甚だこれを醜しとなす。

文雅の道にのめり込むあまり、その真摯さをではなく、詩文を嗜むことをそのままステータスとし、そうでない人々を蔑視するといふ人も珍しくはなかった現状を序文は伝えている。この時代の文化活動に対する情熱はこのように過激でもあった。本書で取り上げる

野村空翠もまた、家業を擲って風雅の遊びに従った、傍目には輕薄亡状とも称すべき町人文人の一人に数えられる人である。

野村空翠、字を圓平といい通名次右衛門、諱も圓平といった。号を空翠・栖霞・空翠楼・協幽齋・残月書屋・梅遜栗士等といい、一般には屋号で「八田屋」と記されることも多い。空翠は天明四年（一七八四）金澤の日傭頭を業とする八田屋に生まれ、兼ねて酒造を営み典舗ともなった。幼年より学を好み、和漢の書籍を涉獵し詩賦に耽り禪にも参した。書を懷素・祝枝山等に私淑して画も能くし、謡曲・彈琴・和歌・茶湯・囲碁等の技芸に通じた旦那衆の一人でもある。子がなく四十歳で家を弟に譲ってより、自分は詩賦修行に志して西は九州から東は仙台・青森を踏破して諸名家の門を敲き唱酬を求めた。ために北遊する文人の多くが空翠を訪うた。大窪詩佛を師とし、日野資愛・菊池五山・谷文晁・市河米庵・頼山陽・篠崎小竹・小石稷園・田野村竹田・浦上春琴・雲華大含・広瀬淡窓・広瀬旭莊等と相知り交誼を深めた（注5）。

一・文政元年まで

空翠が加越において文人としての地歩を確立したのは、詩佛が金沢に初めて北遊した文政四年においてである。この間空翠の詩活動について伝えるものはほとんどない。いまかろうじてその消息の分かるものの内、最も早い例を挙げれば、寛政十二年に曾田菊潭と共に山橋を月を觀て賦詩した事実である。この年は菊潭は十八歳でいまだ修学中の身分で空翠も十七歳である。そんな若い二人が、始め

て味わう文化の香りにひかれるように、月を愛でて賦詩したのである。菊潭は「庚申七月十五夜、空翠と共に山橋に月を賞づ」と題して、仲秋の名月とも疑われる月を求めて、山橋から眺めた光景を、「城中十萬戸、幾人か月に對して斟まん。野店は久しく留まり難く、相ひ顧みれば更深なるを知る。猶ほ街頭の月を踏んで、帰りなんとすれば夜沈々」と詠じた。詩作に対するいかにも初々しい感性が新鮮である。空翠の詩はないが、風雅に対するあこがれは、菊潭にも劣らぬものがあつたであらう。

菊潭は名を迪（よ）といひ、諱は洋、通称を左助、号を菊潭という。天明三年（一七八三）小松の御馬廻組曾田靜叟政布の嫡子に生まれ、少壮にして江戸で古賀侗庵に学んで詩文を能くした。文化七年十一月学校讀師加入となり、諸役を経て文政五年新知百石を拝領し翌六年父の致仕によつて家禄二百石を継いだ。

そしてこの翌年空翠は母を喪ひ、ついで七年後の文化五年父も喪つた。空翠二十五歳のことである。そして更にその六年後の文化十一年頃空翠は江戸へ発つた。目的も用件も未詳であるが、後年の空翠の放浪癖を思い合わせれば、風雅の心止みがたく出掛けたのではないかと疑われる。時に二十歳程年長の景任がその出立を見送る作には、そうした空翠のはやる気持ちがかいま見える。

野村空翠の江戸に之くを送る。

離杯は酔ふに易からず、子の遠邦に之くを憐れぶなれば。征馬は初夏に逢ひ、啼鵲は當に宿る時なるべし。客愁は連夜の雨たり、山色は幾朝の詩たらん。定省には空しき多日なれど、帰程は期を誤つことなかれ。

この時空翠は両親を共に失ってしまっている。だから「晩の寝具や朝の安否を氣遣うべき親はなく、たとえこのように空しい日々を過ごしていようともし君よ、帰るべき期日を間違ふことなかれ」と詠いかける景任には、子息を見つめる如き暖かみさえ感じられる。景任は林翼の二子で明和二年（一七六五）に生まれた。孫坡が父の養嗣子となったので、景任は亀田甚右衛門淨品の嗣子となった。初め名を文助といい後喜左衛門と改め、諱を景任・任、字を尚綱・舜年（しょうこう・しゆんねん）といい、号を商齋・聴松庵といった。俳句・和歌・詩共に能くし、詩を伊藤莘野に従った。宮竹屋の分家六代で、金沢川南町に住んで酒造を業とし、また副富村の長でもあった。町屋の跡を嗣いだ景任にとつて年少とはいえ空翠は文化的趣味を同じくする友人として格別の親しみをもったのだろうか。或いは空翠は孫坡とも終生交遊を続けたから、義弟とも交遊が続いたのかもしれない。

なお東林の「閑雲詩史」によれば（注6）、文化十四年六月九日孫坡宅の小集に東林が参加し、その時空翠を始め孚先・一堂・孤岳も参加していたという。この内一堂は後に触れるが、孤岳は「北遊詩草」に二首詩を載せる人で西勝寺の僧である。この西勝寺は東林が金澤に来遊する時、よく立ち寄った寺院でもある。

二、詩佛の北遊まで

さて詩佛の北遊について述べねばならぬのであるが、今少しその北遊前の加越文人の活動状況について触れねばならない。以下手元の資料を基にした調査でそれを示す（注7）。

文政元年（一八一八）

1月 横山致堂、江戸で詩佛の詩に和し、また呉竹沙に逢う。

（致堂）

2月20日 東林、長崎浩齋を訪ねて賦詩。（東林）

29日 金子鶴村、長井葵園より梅花を送られ賦詩す。（日記）

3月3日 竺侶鳳、氷見の金橋千手寺で小集を開く。（東林）

5日 鶴村、葵園と寺町で桜見。（日記）

20日 この頃致堂、江戸の諸友と留別し、24日に呉竹沙と板橋で別れる。（致堂）

※春、東林、浩齋と栗田容齋の作二十首を併せて「浩容春興」二十首として刊行す。

4月7日 致堂家に帰る。（致堂）

13日 東林、玄妙・淨水寺経将・妻の玉蛾と山中温泉へ。ここ

で金澤の金子東陌・勝山の雨林に遭遇。（東林）

※この月、奥村漪藍の別業鑑水亭で小集。銭田立齋・韓西阜が参加。（立齋）

5月10日 高岡の浩齋邸詩会、東林・蛸洲参加。（東林）

20日 この頃詩会。（日記）

6月3日 二口の誓光寺小集。（東林）

8月14日 葵園亭詩会。（日記）（秋声館）

16日 葵園・渡邊西園が鶴村宅で詩会。19日、鶴村・鶴山・孫

坡・空翠・一堂の詩あり。23日、鶴村、石川羅山に詩を寄せる。（日記）

9月2日 高岡利屋町龍雲寺で書畫会。（東林）

25日 大阪の鶴山、鶴村を来訪。(日記)

26日 西園宅詩画会。(日記) (秋声館)

10月11日 可崇・栗齋・寶樹が東林を来訪。(東林)

16日 鶴村の六十歳を賀す詩宴。葵園・西園・榊原拙處・照月寺参加。(日記)

19日 和田筠齋が来訪。(秋声館)

24日 鶴村、松月寺で葵園と賦詩。(日記)

11月1日 葵園亭詩会。(日記)

12月4日 片原町超願寺詩会。5日、称念寺詩会。17日、称念寺詩会。

18日、内藤一学氏詩会。(東林)

※冬、致堂・蓀坡が唱和。(致堂)

※この年、柳涯随処小集。(秋声館)

この年春、致堂は江戸にいた。二十歳で参政となった致堂はこの時三十歳で、前年の文化十四年三月に金澤を発って江戸に来ていたのである。致堂が詩佛に会ったのはこの年の秋頃であるが、妻の蘭蝶と合作の「海棠園合集」は越中の詩僧東林を通じて既に前年、詩佛の手に届いていた。そういう経緯もあって致堂が詩佛を招飲したのである。「香を焚き地を掃ひ起つて相ひ迎ふ。太だ喜ぶ新知の古情に勝るを。磊落たる笑談にも渾て韻有り。心を傾けて一吟の成るを待たず」と致堂の作にあるが、詩佛を待ってソワソワ落ち着かない様子が見て取れる。時に詩佛は五十一歳で、致堂の父政寛より四歳年長であった。そしてこの年更に詩佛の「春初」の作に和し、その後間もなくして江戸の画家呉竹沙とも会った。竹沙の詩中に「頭を回せば往事は已に三載、旧を話して猶は疑ふ是夢中か」とある

ごとく、三年振りの再会であった。竹沙は三月金澤に帰る致堂を板橋で留別してもくれた。

金澤では、鶴村や葵園達が交遊を深めていた。鶴村は諱を有斐、字を仲約・君仲といい、京で皆川淇園の門に学んだ後帰国して小松の集義堂の開講と共に教授となり、在勤十年後に今枝氏の儒者となつて十二人扶持を得、自邸で門弟を育てていた(注8)。一方長井葵園は名を在寛、通称を平吉、字を寛郷・子毅といい、葵園・陶齋・董齋・董居を号とする加賀藩を代表する儒者で詩人である。長井助左衛門煖寛の婿養子となり、文化二年養父の跡目となつて遺知百石を襲いで組外に列し、明倫堂助教となり時に四十歳であった。金澤の文人でこの人の門弟であった人も多い。

この年八月の「鶴村日記」に載せられた空翠の詩を載せておく。何時の小集かはつきりしないが、空翠のこの詩は他に載せぬ作である。「今宵閑却此亭堂。何事西風送雨来。準擬天上洗明鏡。可知三五宿雲開。」「今宵この亭はひっそりと忘れ去られたようにひっそりしたたたずまいである。なのに何事であるか、西風が雨を送つて来たのは。疑つてみるに、天上の明鏡を洗うためかと。やがて知るであろう、十五夜の明月にかかつていた宿雲が明けてくるのを。」大意を言えば上記のごとくである。即席の作らしくて、推敲の跡もあり伺えない作であるが、逆に見れば発想に任せた肩の力の抜けた作り馴れた作とも言えよう。

また致堂と交誼の深い蓀坡は、先述した林景任の義兄で加賀藩を代表する漢文学者である。明倫堂の新成に伴つて助教に迎え入れられ、後に藩主の侍讀ともなった。時に三十八歳であったが、既に加

賀藩の文人達の中で指導的存在ともなっていた。ちなみに文政元年までにおける孫坡の交遊を「晚晴閣詩稿」等で調べると、富田痴龍・津田養・奥村漪藍・江守長順・佛后惟宗・空翠・亀田鶴山・錢田立齋・一堂等がいる。彼等について略述しておけば、痴龍は博覧強記で知られる漢学者で、この年は五十七歳で出銀奉行等の諸役を辞して退隠していた。また奥村漪藍は二千七百石取りの藩士で、時に病氣により役儀を遠慮していた。津田養は菜齋と号し医者で詩畫に長じ、江守長順は九十石取りの大聖寺藩士で、佛后惟宗は宗龍寺の住持だったが、既に文化十三年に没している。

これ以外は金澤の商賈でいづれも家柄町人の身分を得た人々である。亀田鶴山は時に五十歳であったが、金澤片町の薬店宮本屋本家の七代目で、町年寄・銀座役を勤め、文化四年には卯辰山北方の春日山に陶窯を開き、青木木米を招いて新しい陶器を製していた。また一堂は金谷彦右衛門と称し、加賀藩儒五十嵐剛伯からその七絶を賞された金谷懋績の末孫で、この人も詩を能くした。

その他奥村漪藍別業の小集に参加した西皐は、本吉屋と称する商賈で町年寄を勤めて五人扶持を得、この年三十六歳で家柄町人に任じられていた。また鶴村の六十歳の賀宴に参加した榊原拙處は名を守典、通称三郎兵衛といい、字は子典、号を拙處・三痴・蘭所・夢松・逸翁等と号した。上田龍郊の弟であるが、文化三年今枝内記の臣榊原武兵衛の婿養子となり、遺知百五十石を嗣ぎこの時二十八歳である。字を好み詩を作り、葵園の門に学んで南宋の画を能くし、後年集義堂の教授ともなった。なお以上の内、鶴山・立齋・西皐・蘭所・葵園は後に空翠樓小集にいつも顔を出す同人とも称すべき

人々である。実際のメンバーは詩佛の北遊以後に固定しようだが、この頃既に固定化しつつあった。

一方越中高岡では、東林を中心とした小集が繰り返されており、津島栗齋・長崎浩齋・栗田容齋・佐渡虎・渡邊玄碩等がそれに参加していた。文化十二年に富山の鳥林文吾の門を出て、改めて東林の門に学んだ人々で、いづれも当時青年医生であった。栗齋は時に二十五歳、浩齋は二十歳、玄碩は後に津島姓を冒したがこの時二十四歳である。容齋・虎の年齢は未詳であるが、いづれも詩書を能くした文人でもあり、後に高岡で神農講を結成し、また陸舟樓を根拠に詩文に切磋琢磨し高岡文人の中心となった人達でもある。なお称念寺は釈嬭外がその住持で、詩佛の北遊の時に詩を呈した人。超願寺は宝樹が住持を勤めて東林の詩会に度々参加する人であるし、内藤一学は代々貞拙を名乗った高岡の医者である。

文政2年（一八一九）

1月1日 春日小集。三宅芳溪・小川玄澤・大西主馬・廣瀬・葵園参加。（秋声館）

2月5日 葵園を鶴村が招飲。（秋声館）

9日 鶴村、葵園の江戸に行くのを送る。（日記）

10日 高岡快哉楼で光慶寺春窓の追薦会。浩齋・栗齋・侶鳳・玄妙・嬭外・宝樹・龍樹・東林が参加。次いで11日称念寺書畫会。侶鳳・栗齋・竹山・浩齋・敬周・雪江・玄妙・東林が参加。（東林）

※この月、大地文宝の白雪樓詩会。立齋・亀田章参加。（立齋）

※この月浩齋、広千字文を刊行。(東林)

3月20日 照月寺で葵園を送る詩会。(日記)

3月28日 鶴村、松月寺で桜見。(日記) (秋声館)

※この月立齋、文宝に陪し瀟藍の翻花亭詩会に参加。また西阜の

茶亭一草庵や閑雲亭で小集。(立齋)

4月11日 鶴村・拙處十一屋で菜の花見物。帰途渡邊西園を訪問。

(日記)

5月9日 富田亭画会。南溪・東旭・岡田揚齊等参加。28日、山田

九阜来訪。松月寺和尚・渡邊西園を招き賦詩。(日記)

6月2日 西方寺・松月寺和尚が来訪して賦詩。14日、鶴村亭詩会。

西園・蘭所・松月寺・石蘿月・蘭洲参加。(日記)

※この頃東林、詩佛より「西遊詩草」二巻を贈呈さる。(東林)

9月 太田錦城、西遊す。(白湯集)

10月16日 致堂江戸へ発つ。(致堂)

11月 致堂、詩佛と詩の贈答す。(致堂)

12月8日 浩齋宅小集。嬾外・栗齋・容齋・東林が参加。(東林)

23日 致堂、江戸より帰る。(致堂)

※この年、蓀坡、西阜に次韻する。(晚晴閣)

この年は殊に金澤の文化活動が華やいだ年である。前年十二月に芝居が公認され、翌二年には犀川の川上新町に常設の芝居小屋と芝居茶屋が建設され、芝居が興行されたこともあってだろうか。「鶴村日記」によれば、芝居は連日大当たりで一人六十文程の木戸銭が揚がったという。京都からシユウという女形が来て評判を取っていたからだという。また七夕には軒々に燈火を吊すので、鶴村も知人

を多数誘って出掛けている。こうした物見に加えて、桜や菜の花見の遊山等、事ある毎に春に興ずる人々の姿がまた見られた。

立齋が行動を共にした大地文宝はこの年四十三歳で、新井白石から千里の駒と称された昌言の嫡として、算用場奉行を拝命して三百石を賜っていた。詩や書畫を善くし、市河寛齋・詩佛・五岳等と誼を持ち、鶴村と最も交誼があつた。書樓を白雪樓といい、ここで持たれた小集も多い。なお閑雲亭は西阜の書樓であるが、この頃から屢々小集が記される。山田九阜は本吉の船問屋で酒造を業とした明翫屋嘉平のこと。号を九如山人・淡菊・九阜と称し、町年寄となつて毎年京に上り、風雅の交遊をした。書を村瀬栲亭に、画を浦上春琴に習つて造詣が深く、この屋敷を「松風館」と呼び、空翠等多彩な文人が集まつた。鶴村の二十歳頃、二度に亘る火災で家資を蕩尽に帰した時、その資を援けて経を講ぜしめ、かつ京の皆川淇園に遊学せしめた人物でもある。また松月寺は野田町にある曹洞宗の寺院。その桜は有名で、室鳩巢等多くの文人が訪れた。

この年西遊に発つた太田錦城は、大聖寺侯の侍医樫田玄寛の七男で順格の弟。諱を元貞、通称を才佐、字を公幹、号を錦城・多稼居士・春草翁等と称した。大聖寺新町に生まれて儒を山本北山に学び、やがてその門を辞して生徒に教え、文化七年吉田侯松平信明の厚い請によつて世子信順のために書を講じていた(注9)。「白湯集」は文政二年九月に江戸を発つて、翌三年六月まで西遊した時の作を集めたもの。詩百八十首、文十一題を載せている。

越中ではやはり東林を中心にして小集が頻繁に持たれている。追薦会を持たれた春窓は栗齋と共に東林の詩弟子である。侶鳳は金橋

山千手寺の住持で、玄妙は東林の弟。高岡の光西寺の住持をしていて、詩佛の北遊の時にも小集に参加し、また空翠と交誼を善くした人でもある。蠟外は称念寺の住持で名は海導といい、詩を能くし詩佛の「北遊詩草」に詩を載せる人で、龍齋は高岡の医師佐渡虎である。また翌日の称念寺の書畫会の参会者の内、敬周は高岡の画家堀川敬周のことで、雪江は東岳と称する城端の画家で京に住んで画を業としていた。

文政3年（一二二〇）

1月 太田錦城、京都で日野資愛・吉田袖蘭と交遊。（白湯集）

※この頃蛸洲、櫟堂上人の院に諸子と小集。（蛸洲詩稿）

2月28日 致堂、前田氏別墅で遊ぶ。（致堂）

3月10日 松月寺の櫻見、蘭溪・南阜・馬淵新蔵参加。（日記）

14日 海棠園小集。蓀坡が致堂に次韻。（晚晴閣）（致堂）

18・21日 蘭所が鶴村を訪れて賦詩。22日、堀辰之助が来訪して賦詩。26日、佐藤門之助・堀・蘭所・廣瀬が来訪。

また同日、蘭所・廣瀬と共に閑雲亭を訪う。（日記）

※この月錦城、頼山陽の鴨川書樓を訪問（白湯集）。また立齋、松月亭小集に参加（立齋）。また致堂、蓀坡の繪に「富士峰図」を題す（致堂）。

4月 致堂・蓀坡唱和。（致堂）

5月3日 田中右一、鶴村を来訪して詠歌。（日記）

4日 田中躬之・櫻井鴨行と共に閑雲亭に遊ぶ。（秋声館）

6月 仙台の東洋老人が越中に来る。（蛸洲）

8月1日 高岡超願寺書畫会。東洋・勤齋・良俊・南雀・文齋・迪

堂・敬周・蛸亭・浩齋・痴王・東林・他社友が参加。

2日 陸舟樓小集。東洋・蛸洲・浩齋・玄又・敬周・東林が参加。（東林）

23日 富澤周の没を悼む。（秋声館）

※夏立齋、前川君が江上に避暑するのに陪す。（立齋）

9月9日 立齋、友人の宅で飲宴。（立齋）

※秋、致堂の「書懷十八首」に蓀坡が次韻。（晚晴閣）

前年芝居小屋が常設されたのに続いて今年三月遊所が公認され、西と東の二カ所に茶屋町が建設された。その様子を伝える資料は未詳であるが、やはりこの頃存在した高岡の贅女街を見ると、現在の川原町あたりに存する二十楼ほどの遊楼には、市河米庵・中嶋棕軒・皆川淇園・頼山陽等、当代を代表する儒者の書になる扁額が掲げられていた（注10）。その遊楼は千保川添いにあり川舟より訪れる客の心を喜ばせた。服部淳卿は「無限の歎娯の中に満つ」と詠い、高岡の医師で勤王の士だった山本道齋は「冶郎は灑ぎ去る別離の涙、結を川原に作し満つること埜霜のごとし」と詠った。千保川添いの柳枝に後会の契りを結んだ紙片が、さながら野に降りた霜のように散り乱れているというのである。その繁華な様が想像される。

春になると鶴村一家はあいかわらず、芝居見物や犀川の梅見・松月寺の桜見にと華やいだ日々を送っている。加えて蘭所との賦詩や西臯の閑雲亭での小集など多忙である。殆ど毎日行われた今枝氏や寺西藏人等の講義の合間を縫うての行事である。なお蘭溪は島蘭溪といい、毛利半山の「半山百絶」に、天保末年頃京に行くのを送ら

れている。また南阜は増田南阜のことで、詩佛の再北遊の時空翠楼に詩佛を訪ねて賦詩した人。

西阜の閑雲亭に遊んだ田中躬之は本吉の町儒医である。京で賀茂季鷹に国学を学んで和歌を能くした。この年二十四歳であるが、鶴村の詩塾におり、また堀辰之助・佐藤門之助・土谷顕蔵・梁田養元・大凡蘭洲も同門である。なおこの年空翠は店舗を尾張町に移したが、空翠の行状について伝えるものはこれのみである。

錦城の西遊で京で交遊した日野資愛や吉田袖蘭は、共に勤王の志を持つて行動した人々で、後年空翠とも浅からぬ縁を持った人々である。資愛は字を子博、亞相公と称し、南厳院と号した。京都の日野資矩の男で、詩佛や頼山陽・梁川星巖等とも親交し、空翠は松任本誓寺僧達羅や雲華大含を通して知った。皆川淇園について漢学を修めて漢詩や和歌を能くし、この年四十一歳になっていた。また吉田袖蘭は名を佐登子といい、京都の医者吉田南涯の女で、幼より詩画を好み、書を頼山陽に、画を中林竹洞に学んだ。後画家の大蔵笠山に嫁すが、この時二十四歳だった袖蘭は錦城が京に來ているのを知って、詩を錦城に乞うたのである。錦城もまたこの人の家で同功蘭齋が「野狐別児伝奇」を語るのを聞き、座中の人の感動で凄然垂涙するのを見ている(注11)。後年のことであるが空翠もまた袖蘭の琴を聞いている。袖蘭は奏琴も能くしたのである(注12)。

なお錦城が三月に頼山陽を鴨川の書楼に訪ねた時、山陽はわざわざ「伊丹の酒四品」を揃えて款待してくれた。京に來ても「必ず杯酌を命ずる」のだが、甘味で口に合わぬことにクサクサしていた折の款待であった。四品とも美醞で、錦城は「此の日始めて京師もま

た酒有ることを知」つたという。ついで山陽の気宇を推察するに、「一時爽快の士」たるところは「関左の人に肖」ることを知って、「その相待の厚きことを悦び、また竊かに感ずる所があつて」一絶を賦して感謝に代えたのであつた。

越中では寺崎蛸洲が高岡詩壇の耆宿として君臨し、文政初年頃詩社「松映房社」を創設してその主盟となつていた。字を孟恕、称を三木屋半左衛門・三樹一貫、號を蛸洲・櫻廟等と称した。大樸の子で代々高岡木舟町で町役人を勤め、藏宿を営んだ。詩文を村瀬栲亭や皆川淇園に学び、稗史小説を好んだ。交遊する所は内外に多く、大槻玄沢・詩佛・六如上人・活湛禪師・梅辻春樵・画人東洋を数え、またその門より長崎浩齋・清水路園・桑山石蘭・僧樸堂・澤田等岳・石川雪徠・上原龍圃等が出た。文化二年に町年寄に就き、文政二年には隠居して六十歳になっていた。

超願寺に行われた書畫の会は盛大で、京の東洋、富山の勤齋、伊勢の良俊、紀伊の南崔、奥州の文齋、加賀の迪堂、高岡の敬周・蛸亭等の画家が集まつた。大西氏はいづれも東洋の弟子ではないかといわれる。東洋はこの時六十八歳(56とも)であるが、七月に來遊していた。そしてその翌日この参会者がそろつて陸舟楼で遊んだ。

文政4年(一八二一)

1月1日 秋声館小集。(秋声館)

15日 蘭所、鶴村宅を來訪。(日記)

※この頃晩晴閣で小集(致堂)。またこの頃、市河米庵が江戸に召され新知を賜り、十四首を賦詩(米庵百律)。

2月12日 九阜と鶴村、晴暉堂・大乘寺に遊び帰り閑雲亭に寄る。

(日記)

3月8日 長井宅詩会、蘭所と同道。12日、蘭所・葵園・致堂、田

辺吉平の糸桜を見物。16日、鶴村と妻、松月寺や極楽寺の桜見。18日、堀辰之助・佐藤門之助・蘭所が鶴村を来訪。19日、致堂・蘭所・葵園同道で松月寺の櫻見。(致堂) (日記)

※この月、蓀坡が柱願庵で小集。また蓀坡邸で小集。また森固来、

風月楼で小集。また西阜、都梁館で小集。(立齋)

4月11日 晴暉堂書畫会。12日、西方寺書畫会。(日記) 20日、鶴

村、土谷顕蔵の江戸に遊ぶのを送る。(致堂・秋声館)

26日 鶴村宅書會、葵園・武田・琴味・蘭州・梅堂・堀辰・蘭

所・西方寺・松月寺参加。(日記)

5月5日 蓀坡、二三友と蓮湖に遊ぶ。(晚晴閣)

8日 蘭所、宿題の詩を鶴村宅に持参。(日記)

9日 蛸洲、金毘羅に発句十五句を奉納。(蛸洲詩稿)

8月3日 「白山史」8冊完成。6日、飛驒の旭亭が来訪。(日記)

15日 致堂、蓮湖に月を賞す。(致堂)

またこの日、松月寺雲水僧が鶴村宅に来て賦詩。19日

葵園来訪して烏石の書を見せる。(日記)

9月 蓀坡、華山和尚の来訪を受ける。(晚晴閣)

11月1日 大津の畫師梅岸が鶴村を来訪。12日、鶴村、詩佛に賦詩。

(日記)

21日 鶴村、尾張画工梅逸に詩を寄せる。(秋声館) また松月

寺に侶鳳和尚が来て画竹す。(日記)

※この月致堂、梅逸道人の画卷に題す。(致堂)

※冬、稻毛屋山が高岡に来る。(東林)

※この年、津島栗齋の没を悼んで三首を作る。(蛸洲)

※この年「春藻錦機」が刊行される。

この年鶴村は、天明元年に白山登山を始めてより四十年間暖め続けてきた「白山史」八冊を完成させ、一部を聖堂に寄贈した。鶴村から尾添口を経て白山へ登るルートで、実地に踏査した神祠・名跡・産物・伝説を記し、所々の見取り図を添えたものである。これが基になって文政十二年「白山遊覧図記」五冊が完成する。またこの年になると、鶴村を中心とする小集や書畫会がますます頻繁に開催され、時には鶴村の近隣にあった西阜の閑雲亭に向いて遊ぶこともある。賦詩を通じて彼等は、武士や町人・百姓の身分差を越えて、文化的交流を日常化させつつあるのである。

一方相変わらずぬ人気を誇る芝居に加えて、この年の九月には犀川の川原で相撲の興行も行われた。これも大変繁昌し、鶴村も知人数人と共に見物に出掛けている。そしてこの年はまた、様々な文化人が各地から来訪したのである。先ず八月飛驒の旭亭が来訪し、九月には詩佛が来遊し、またその頃稻毛屋山も詩佛の後を追うように高岡に来遊し金澤に向かった。屋山は時に六十七歳であったが翌年七月没している。十一月には大津の画師梅岸や尾張の画工梅逸が相繼いで訪れた。一々詳述はしないが、彼等は金澤の文人と交流を繰り返し、新しい刺激を与え会った。鶴村のみに限ってみても、十一月一日には大津の梅岸の来訪を受け、その後数日は蕎麦の振る舞い等

接待で忙しい。十二日には詩佛に詩三首を送り、二十一日には松月寺に富山の侶鳳を迎えてその画竹を見、その夜尾張の画人山本梅逸と初対面を果たしている。十二月十一日には旭亭を招いて河漏（そばきり）を御馳走してそこへ菊溪や松月寺和尚も招き、また翌日には菊溪宅に出掛けて旭亭を留別するという風である。

一方西臯・蓀坡や立齋にしても、詩作の多さと相俟って小集の開催の頻繁が目立って来ている。またこの年小集を開いた森固来は通称森下屋甚兵衛といい、号を固来・幾暁庵・松裏庵という俳人で、この年三十五歳であった。加賀安宅の生まれで金沢に住み、町役人となって俳諧を眉山・蒼虬に学んで幾暁庵・松裏庵を継いで、その楼を「風月楼」といった。詩文も善くしたのである。

この年の注目の一つは、蓀坡や致堂の蓮湖での遊山があげられよう。蓮湖は河北潟の異称であるが、加賀でいえばこれ以降蓮湖に加えて琴湖・牙湖・柴湖への遊覧が数を増すことになる。^{（注13）}

越中高岡ではこの年六月二十三日大火があった。「高岡市史」によれば上川原町より出火した火はまたたく間に三十七町二千数百戸を焼失したという。「鶴村日記」では、「昨日昼より夜八つ時まで高岡大火、四千斗焼失」と誌す。詩佛が来遊したのはそれから間もない三ヶ月後の九月のことだった。

蛸洲はこの年六十一歳になったが、五月金毘羅に発句を十五句奉納した。またこの年九月十八日津島栗齋が二十九歳で没し、東林・痴王・頼外・南半村・浩齋はその死を悼んで「挽詩集」一卷を賦した。この内半村は二十四歳で、詩佛の北遊以後より「陸舟楼」や「松映房」社に参加して、越中詩壇の中樞となって行く。

この年越中で特記すべきことは、「春藻錦機」が高岡の板屋小石衛門によって刊行されたことである。本書は漢詩・繪・和歌・発句で構成された、文政年間における高岡文化の集大成で、高岡の春を多方面から表現し尽くそうとする意図も伺える。いま全ての作を数えると百三十四作に上るが、ここでは漢詩のみに限って作者名を掲げると次のように二十四人を数える。なお注記は「高岡詩話」のものによる。1. 僧玄妙、2. 高嶋誠處、3. 僧法隆（字周濟、光榮寺老僧）、4. 高嶋玄臺（号赤松春、称松井藤馬、高峯鼎亭の義子となる）、5. 長崎浩齋、6. 西村緑處（称西村与三男、小堀八太夫の弟だが西村氏の後となる）、7. 山本櫻園（名篤、称一寛）、8. 竺立道（号石雲、笹河広濟寺先住）、9. 北陵雄（鴨島教恩寺先住）、10. 佐野成章（号六動、六渡寺村佐野屋年次郎）、11. 吉塋屋喜兵衛（号林檎主人）、12. 清水路園（榎屋貞助、名叔斐、字子章）、13. 桃里鳥郊（大阪屋武左衛門、号桃里老人）、14. 僧詩天（名獅子、字王吼、下牧野東弘寺先住）、15. 上野屋嘉右衛門（百姓町の人、名横、号鳥郊）、16. 僧法周（開發村妙専寺先住）、17. 和田彦齡（名維、称藤甫）、18. 僧樸堂（妙国寺住持）、19. 松田丁夢（号木舟）、20. 粟田庸齋、21. 僧東林、22. 寺崎蛸洲、23. 菊池静齋（菊池静齋）、24. 長崎蓬洲（号贅葬老人）。

三、詩佛の北遊と加越文人

詩佛が北遊の旅に出たのは文政四年九月である。松代から牟礼・柏原を経、越後の高田から親不知を越えて越中高岡には九月十六日

に入った。その日は竹友亭に泊し、翌日は長崎浩齋の案内で石堤村の長光寺東林を訪ね、そこで一泊して翌日はその近くの虎溪に遊び、十九日には石動の宿へと移り、金澤に入ったのは九月二十日である。ここから先の詩佛の行動については、大森林造氏の「大窪詩佛ノート」(注14)が詳しいので、筆者は空翠や加越能の文人を主に述べたい。なお出典を記さないのは「北遊詩稿」による記事である。

冬の寒気を連れてくる山瀬の風が吹き始めた二十三日過ぎ頃、金沢で最初に韓西阜から招かれた。西阜はこの年四十歳を迎えていた。やがて二十六日午前頃からは雨を伴い翌日には大雨に変わり、二十九日には雷に霰混じりの大荒れとなった。詩佛が北陸に来て始めて体験する冬らしい冬である。そんな日詩佛は蓀坡に招かれた。「辛巳秋九月、詩佛先生敝邑に来遊す。一別より已に十二霜を経、今再び逢ふことを得て喜んで賦す」と題するこの時の詩にいう。「蕭々たる秋雨は茅蘆に灑き、旧を話して同じく傾く酒一壺」と。二人の話は十二年前の交遊に移ると、「人世の変遷を聞いて便ち驚く。十箇の交朋、九は零落し、喑壇に今日新名を識るを」と嘆じた。この時の詩佛の詩にもいう。「狂雨顛風海山に暗し、山頭の楓葉は半ばは爛斑、恰も東海の仲春の節の如し。寒暖陰晴頃刻の間」と。次いで詩佛は碧梧窓小集で亀田章に次韻し、続いて空翠楼に招かれ、同席した立齋が詩を贈った(立齋)。

雨や曇りの後天候は十月に入って回復し、一日は陵雲閣主人に招かれ、二日は小春の晴天に引かれて諸子と共に大乘寺に遊び、再び空翠楼に招かれた(立齋)。空翠楼は町の中にあつたが、窓を開ければ青山が眼に飛び込んでくるという立地である。卯辰山と浅野川

を前にした尾張町あたりだったろうか、詩佛は「雨後の炊煙水を隔てて颺る」とも詠じている。そしてここにも数泊したのかもしれない。空翠はこの頃詩佛の門弟となったと思われ、以後殆ど離れることなく詩佛に随行したように見受けられる。

その後五日から降り出した雨が、七日になると雨風の激しい荒れ模様となった。そんな時詩佛は、伊藤半仙・谷川鳶齋・空翠と共に山中温泉へ出掛けた。あまりの雨風の激しさの故であろう、途中鳶齋と空翠は雨の中を詩佛の籠の先導をしてくれた。粟生で船に乗る頃は風は波濤を巻き、雪は天に漲るといった有様になった。琴湖を船で渡って山中に着いたのはその日の夜であった。山中温泉では八勝を詠じ那谷寺にも遊んだ。そしてここに富田菁莪・大井掬月・釈林泉等が酒などを持参して訪問し、詩佛も蓀坡・半仙・西阜に詩や墨竹を送った。二十七日頃詩佛は半月余り滞在した山中を発ち、次の宿泊地の小松に向かったが、着いた頃は「海風雨を吹いて暮べ紛々」という暮れ方だった。

小松では松風館に宿し、その後伊藤半仙宅に立ち寄った。ここにも詩佛は数泊し亀田章も加えて小集も持った。そして半仙宅を立つ前の晩、詩佛は「明朝雪あらば重ねて来り看ん、百天の庭松玉塵を堆を」と詠じ、半仙は「雪裏端なくも忽ち別離す」と詠じた。十一月に入ってから晴雨を繰り返した空も十一日からは雨になり、雪も交じったようだ。そんな日に半仙宅を発って、立齋宅にも立ち寄ったのは十四日で、ここにも数泊した。これまで常に従った三人に加えて鶴山と尾張から来たばかりの梅逸も加わった(立齋)。梅逸は翌年五月まで金沢に滞在した。

その後間もなく金澤に戻ったと思えるが、戻ると致堂から詩を贈られており、その邸にも招かれて五度唱和した。また致堂のために「海菜園十二勝」を賦詩した。致堂・絳雪陰窠・環翠樓・雙清茶寮・昼寒亭・錦繡堆・紅葉湾・松嶼・調馬場・鯉魚橋・百花経・蓮蕩がそれである。金澤での宿舎は中村碧山邸であつたようだ。碧山の詩に「詩佛先生、金澤に來たり予が家に寓すること數閏月、今まさに別れんとして之を賦し送り奉る」とあつて、詩には「半年の交誼最も多情たり。夜讀に光を分つ一短檠、何ぞ耐へん先生帰去の後、寒窓に獨り曉鐘の声を聴かん」とあるからである。この頃また東山の四並樓で小集が持たれ、巖墨屏・福島脩井・空翠・釈白嶺・尾張の山本梅逸等が参加した。文宝の都梁山館に招かれたのも十一月頃である。詩佛はこの人とも文化六年頃交遊をもつていた。

二十八日は冬至だったが快晴で、立齋宅に再び招かれ「至日」「雪意」「水中梅影」「雪中菊鶯」「雪中尋梅」等の題詠で賦詩した（立齋）。そして束の間の青天も翌日から荒れ始め、師走一日には寒気が激しく雪に変わった。そんな日、空翠・梅逸が詩佛を迎えて再び四並樓で雪を賞する小集を持った。四並樓は東山にあった酒樓のようで、西臯や鹿齋等が好んで小集を持った楼である。この後金澤では翌年の正月にかけて連日雪の日が続き、家々では雪下ろしも行われた。そして師走に入ってから度々詩佛に家書があり、詩佛は帰りを考え始めた。一方金澤の文人達は訪問を止めず、雪声・雪塵・雪燈・雪美人・雪獅・雪夜・冬夜等で題詠し、脩井・西臯・立齋・香林坊緑陰・亀田章等が賦詩した。また曾田菊潭に招かれたのもこの頃で、菊潭は「風窓頻りに燭を剪り、雪夜屢詩を談ず。共に約す鶯

花の節、青を踏んで筑枝を曳かん」と詠じ、來春の逍遙を約した。亀田章が詩佛を送る送別の宴を開き、致堂が梅枝一枝を送つたのもこの頃である。そして連日降り続いた雪も除夕によりやく降り止み、詩佛は梅逸・屋山に詩を寄せた。共にこの冬金澤で年を越す人々で、宿舎を共にしたのであろう。「一霄雪滿つ屋山の頭り、相遇三人遠游を話す」と詩佛の詩にもある。

この雪は年が明けても降り続け五日も雪だった。そんな雪の中を釈東林・長崎浩齋・釈痴王が越中より金澤の客舎に訪うてくれた。次いで詩佛との別れを知つた文人達との別れの宴が続くようになる。十八日は松井蓼齋が送別の宴を開き、蓀坡・鶴山・半仙・立齋・空翠・梅逸等が参加し、二十五日は詩佛が富田痴龍の暮松樓に立ち寄り賦詩した。一月頃開かれたと推定される送別の宴を掲げると次のようである。観音院で觀楓の会。蓀坡・緑陰・西臯・鶴山・半仙・棠坪・碧山・立齋・空翠等が参加。犀川橋で觀漁の会。南臯・曉山・墨屏・石羊・半江・立齋・空翠・屬齋等が参加。四並樓で烏薪を焚いて宴。墨屏・綺屏・雲屏・翠屏・南臯・空翠・梅逸等が参加。これらの送別の宴は、詩佛もいうように「同社争つて相招き、席に山海の珍を具ふ。酔中書或は畫、欲嫂夜は晨に連る。」と、心を尽くし贅を尽くした会だった。また半仙に「名花十友詩」を書いて贈つたのもこの頃である。詩・名・仙・禅・雅・殊・韻・浮・艶・佳友で、これは半仙の別号「十友堂」に因んだのである。

春になつても降り続いた雪がやがて晴れ間を見せ始め、閏一月一日頃となると、雪模様の中にも春めいた陽気を見せ始めた。そんな晴れ間に西臯が留別の宴を開いた。そして巖墨屏が詩佛を大樋町の

旗亭まで送り、立齋・翠屏・梅逸も津幡駅で見送り帰りに立齋は眷々の情に堪えず一詩を送った。高岡に向かって進むと痴王・詩天・浩齋が横田の茶店まで出迎えに来てくれた。横田は現在の高岡駅から二キロメートルほど手前にある。また途中、浩齋の清風明月楼に立ち寄り、陸舟楼には三日間泊した。ここに越中の文人僧玄天・木村東亭・高嶋誠處・詩天・痴王・嬾外・南半村・東林等が来訪して小集を持ち、次いで牧野の東弘寺に立ち寄り、ここで高柳山六勝を詠んだ。高柳山は東弘寺の山号である。帰りを急ぐ詩佛は高嶋誠處を同伴して富山へ向かった。そこでまた小集が持たれ東林・痴王・誠處・半村・菁圃・竹簾・文碩・俊庵が送別に駆けつけてくれ、翌日木村東亭・詩天が同行して滑川まで送ってくれた。滑川では侶鳳が詩を贈ってくれたが、次いで名立・高田・碓井峠を経由して江戸に帰ったのはこの月の末であった(注15)。そして翌二月、空翠は詩佛の後を追うように江戸へ発った。

本来は詩文についても触れねばならなかったのだが、紙数の都合で略し文人達の行状を中心に述べた。次いで文政五年における加越の文人の行状について触れるべきであるが、既に紙数も尽きている。それは次回に譲りたい。

注1 例えば岩波講座『日本歴史』13巻に、西山松之助氏の「江戸文化と地方文化」の著があるし、巻末には「近世史研究解説」があつて、研究の成果が網羅されている。また同講座『日本文学史』第九・十・十一巻にも、高橋博巳・揖斐高・入谷仙介氏によって江戸時代における漢詩文の有り様が論じられて

いる。

注2 金澤高等学校『紀要』34・36号にかけて、加越能における文人を中心に略伝を掲載中である。

注3 富山女子短大付属高校『研修年誌』第十・十八号にかけて、「越中の漢詩人―東林とその交遊―」と題する詳論がある。本書は天保三年の没に際して、友人の亀田敦や毛利彦が遺稿を編纂して「立齋遺稿」一卷としたものである。

注4 空翠については、金沢大学『国語国文』第31号「百万石残照」・「北陸古典研究」第22号「赤壁考」でも触れた。

注5 大西氏によれば、東林の住持した長光寺に現存する自伝風詩史であった。

注6 以下の年表で取り上げるのは次の書によっている。「秋声館詩稿」(秋声館・鶴村日記)(日記)・「致堂詩稿」(致堂・菊潭遺稿)(菊潭)・「晚晴閣詩稿」(晚晴閣)・「立齋遺稿」(立齋)・「蛸洲詩稿」(蛸洲)・「白湯集」・「米庵百律」。なお()はその略号。

注7 詳細は注2『紀要』第35号を参照。

注8 同前。

注9 『高岡詩話』巻三。

注10 「白湯集」に「吉田袖蘭宅、聞同功蘭齋唱野狐別児伝奇、坐中之人、凄然垂涙、夫同功畫名高噪天下、是世人之所知也。其旁長此夜、伎能使人感動焉。其誰知之、是最可奇也。乃賦一絶贈之。」とある。

注11 後の機会にも触れるが、天保年間頃空翠が京・奈良・大阪に

注12

遊んだ時、この人の琴を聞いたことがその書簡に見える。

注
13

注5の両書で筆者は加賀三湖や越中の千保川、能登の穴水灣における遊覧について述べた。

注
14

氏は、揖斐高氏の「詩佛年譜稿」を基に、丹念な詩佛傳を考証され平成10年、梓書房から刊行された。

注
15

以上、大量の加越文人が登場するが、これらの内何人かは前掲『紀要』に紹介したし、残りは徐々に紹介する予定である。